

稲山会通信

第1号

1998年6月1日発行

発行人：新井昭夫 発行所：稲門山の会事務局 TEL03-3367-3723 FAX03-3367-8150 ©稲門山の会1998

OB会代表より

稲門山の会新年会も無事終了致しました。今年の新年会の特徴といえば、今までになく若い会員諸君が多数出席してくれたということです。これは偏に幹事及び連絡幹事諸君の協力によるものだと感謝しています。又4月2日に幹事会を開きまして、これ以上の会員諸君の出席を望むならば、広報担当幹事の新井氏を中心に稲山会通信を発行することに依り、会員の身近な情報や日ごろの消息等をより緊密に伝えることが大切であるという結論に達しました。この情報誌をより充実させる為にも、又永く継続させる為にも会員諸君の近況をより早く、より多くお知らせ下さる様、今後の諸君の協力をお願い致します。

(大国恒雄 S.33)

三田伸一氏（三田先生御子息）より

拝啓

父が逝ってから三度目の春を迎えました。皆様にはお元気のことと思います。

私は三月一日に無事、国際開洋第一高校（平成九年四月に改名）を卒業し、四月からは早稲田大学社会科学部で学ぶことになりました。父の死、慣れない寮生活、と何度もくじけそうになることがありましたが、皆様の温かい励ましのおかげで、「早稲田に入れ」とことあるごとに言っていた父の遺志に、応えることが出来ました。本当にどうもありがとうございました。

今後はアパートで一人暮らしを始め自主独立の精神を養うとともに、早稲田大学で両親の足跡をたどるべく、日々精進して参りたいと思います。

末筆ながら、皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。まずは報告方々、御礼まで。

(三月二十七日)

1998年新年会返信はがきより

- ・昭和33年に卒業して40年になります。元気に山行（260回）も続けています。（清水正昭 S.32）
- ・昨夏シャモニに滞在し周辺を歩きました。（片山淳 S.32）
- ・相変わらず海外出張が多く、席を暖めている暇がない現況ですが、出張を利用してスキーなどを楽しんでいます。（難波菊次郎 S.33）
- ・週2回位、テニスをしています。山は全然行っていません。1997年3月、都立新宿高等学校を最後に定年退職しました。（三浦郁代 S.33）
- ・2月13日から2月24日の日程でネパールへトレッキングに行きます。（鈴木唯雄 S.33）
- ・山登りをやめて30年、10m登るのもきつい昨今です。（石橋正男 S.34）
- ・1月6日に天城山の尾根を歩きました。小岳周辺の山毛櫨林に霧氷がびっしりついてすばらしい美しさでした。旧天城峠までほとんど人に会いませんでした。（阪本まさ子 S.34）
- ・相変わらず忙しく、あちこち飛びまわっています。先日はロッキーの山並を眺め、今度は登りたいとの思いを深めました。（清水保宏 S.35）

ご

挨拶

挨拶

会員近況報告

会 員 近 況 報 告

- ・ 昨年11月～12月、ネパールのソルクンブ地方へ行ってきました。(井出郁太郎 S.35)
- ・ 月1～2回の山行を楽しんでいます。正月は仙丈岳に行ってきました。2月11日には浅間山に行く予定です。(水村清 S.36)
- ・ 毎月の富士登山を楽しんでいます。(7・8月は除く)1月31日、太郎坊よりP往復。(小林伸吉 S.38)
- ・ 7月、タクラマカンへ同期で遠征予定(宮内隆輔 S.38)
- ・ 相変わらず南ア、奥多摩方面を歩いています。先日の大雪直後、いさんで本仁田山に行ってきました。(田野辺親遠 S.39)
- ・ 昨年の山行、燕、谷川、御嶽、月山、秋田駒、八幡平、鍋割山。(斎藤洋任 S.39)
- ・ 昨秋、那須三斗小屋の露天風呂を楽しんできました。(海野俊男 S.40)
- ・ 筑波の研究所で働いています。山はほとんど行っていませんが、夏、家族でキャンプしてます。女房、娘一人の構成。(松浦正道(旧姓：山本) S.41)
- ・ 1年半くらい前から、ぼつぼつ山に登っています。(渡辺征二 S.41)
- ・ 今年の夏、悪沢岳を目指して体力づくりをしています。(森逸岳 S.47)
- ・ 大阪近辺には、あまり深い山がなく、関東の山並みがなつかしい昨今です。(深沢徹 S.51)
- ・ 母校で教鞭をとっております。(丹藤茂 S.53)
- ・ 山やスキーとはご無沙汰ですが、週1回プールで1000mほど泳いでます。(徳永義孝 S.54)
- ・ 山には殆ど出かけていませんが、自転車通勤で何とか体力をキープしています。(里方昭彦 S.56)
- ・ 週末はクライミングジムで過ごしています。(藤井徹也 S.56)
- ・ 子供も幼稚園や小学校に入り、そろそろ一息つけそうです。なつかしい山の会もOB会がますます活発になりうれしく思っています。(肥後朱美 S.63)
- ・ 昨年10月に長男、基徳(もとのり)が生まれました。(勝山宏則 H.2)
- ・ 司法浪人中です。(宝珠山賢次 H.7)

尾瀬岩鞍スキーツアー

毎年、この時期に貸切バス、温泉付旅館でのスキーツアーを行っております。

今年も、3月6日(金)20時に、目白駅前に集合し、尾瀬岩鞍、温泉旅館「旅館みさわ」へ、総勢42名で出発。約3時間程バス内で、1年間の成果を語り合ったり、明日の雪の状況を予想しながら到着。今回は雪の状況も良く、混雑もそれ程でも無く、十分にスキーを堪能できた。特に、2日目の日曜日の午前中は、前夜の雪が締まり、好天下、周囲の山々を眺めながら、鼻歌まじりの滑降はスキーヤー冥利につきる。勿論土曜日夜は、皆様でゲームと宴会。罰ゲームでの上田大先輩の「新人エレジー」の歌唱が見物でした。

参加者はOB、OG及びそのご家族、友人。未参加の方々の参加を募ります。

北八ヶ岳山菜天ぷらツアー

5月9日7時、荻窪を出発。道中佐久で買い出しをして昼前には北八ツ山中の山小舎へ到着。すぐに山菜採りへ。今年是天候不順で山菜はダメかと悲観していたのですが、予想外の豊作。小舎の周りはタラの芽の宝庫でした。さっそく女性陣が天ぷらに。最高の美味を肴に13時には宴会を開始。大国、上田両先輩をはじめ、珍しや和田先輩を加えた宴はエンエンと果てることなく23時まで続いたのでした。

翌日は早朝から活動開始。希望者ごとに隊を分け、白駒池、高見石から丸山、縞枯山方面などをビストン。赤岳まで縦走するという和田先輩を見送り、最後は明治温泉で汗を流しました。

参加者は現地参加を含め16名。天候にも恵まれ、充実したツアーでした。今回が初めての企画ですが、来年以降も実施の予定です。興味をもたれた方はぜひ御参加を。

活 動 報 告

エベレストで遭難した難波さんのこと

文藝春秋社刊の「空へ」という本を読んだ。難波康子さんが遭難した1996年春のエベレスト登山を米国ライターがルポ風に書いたものだが、今のヒマラヤ登山を赤裸々にしたところが面白かった。難波さんは早大野歩の会の出身。1982年暮れに3度目のエベレスト登頂に成功した後、行方不明になった加藤保男さんのファンクラブの主要メンバーでもあった。この時が私の最初のヒマラヤ同行取材だったので、知らない仲でもなかった。難波さんの遭難は東京で取材していたこともあって、本当はどうだったのか、という興味もあった。

今はエベレストのほとんどがガイド登山になってしまった。アイスフォールの通過の仕方がわかって、性能のいいロシア製の酸素ボンベが簡単に入手できるようになった。シェルパの役割分担もできて、ノウハウが確立された。また、ネパール政府も、この大衆化に乗じて登山料をあげ、1ルート1パーティーという制約を取っ払って金もうけに走ったことも手伝っている。難波さんもニュージーランドのガイド、ロブ・ホールに650万円という大金を払って参加している。

ガイドとしてロブ・ホールは最高の部類に入る。その証拠に頂上アタックの時は、最後尾のお客さんについて結局、本人もビバークの後、死んでしまった。責任感も強かったということだろう。だが、大金を払ったお客さんとの関係はなかなか難しい。お客さんが頂上に着くころから天候が荒れだし、「引き返せ」とは言い難い状況になってしまった。また、数十人がぞろぞろと、頂上に向かって登っている安心感もある。お客さんはシェルパがいて、ガイドがいて、なぜ引き返すのか、そう思っても不思議はない。下山の計算をしない群れに悲劇が起こった。

「空へ」はガイド、お客さん、シェルパ入り乱れた人間関係を描きながら、この悲劇を伝えている。ヒマラヤ登山は狭い社会のなかで長期間暮らすため、プライベートな部分が見えやすい。男女関係、性格、行動、参加者のすべてを書いている。難波さんの遭難についてもそうだ。報道では、サウスコルのチベット側で遺体が発見された。風に押されてテントのあるネパール側とは反対に流されていって、そこで亡くなった、で終わっている。ところが、実際はその地点で何人かが生きていた。そのうちの一人が、助かっていたことも明らかにしている。

難波さんの遭難で日本から最初に駆けつけたのは加藤保男と同じJ E C Cの貫田宗男だ。この本にも登場しているが、貫田にこの本の話をしたら、嫌な顔をされた。遺族をなるべく傷つけないように配慮したのに、内臓をえぐるようなことをする必要はないだろう、というわけだ。それで、私も気が付いた。これまで7度、ヒマラヤに記者として行ったが、原稿を書くときには、私生活にかかわる部分にはひととき、気を使った。特に遭難した場合はそうだった。「赤裸々」の面白さに引き込まれて、いつの間にか、立場が違ってしまったのだな、と思わず苦笑してしまった。

(迫田泰敏 S.42)

故宮垣秀章君のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

昭和53年度卒の宮垣秀章君(藤沢山岳会会員)が平成9年7月丹沢玄倉川本流で事故に遭遇し、命を落とされました。

奥様よりのご挨拶、山に情熱を傾けた者なら、思わず身を引き締められます。ご了解の下、故人のご冥福を祈りつつ、その一部を紹介させていただきます。

「夫にとって、山は、情熱を傾けて挑む鍛錬の場でしたが、社会人、夫、父親となるにつれ、山に対する姿勢も変化し安らぎや楽しみを多く見い出すようになりました。公私共に責任の重さも実感していましたので、黒部、黒薙川柳又谷を区切りの山行、最後の燃える山と考えていたのではないかと思います。…夫は、少年の夢と、青年の闘志と、大人の深慮をもった気概に富む卓抜した人間だったと思います。私は、夫の果敢な行動力と私欲のないきれいな心を敬愛していました…」

キナバル山にて 1997

「自然の演出は決して裏切らない」、そう実感させられたのが、今回私たちの挑戦したキナバル登山である。標高4101 mのキナバル山は東南アジア最高峰を誇り、登山道こそ整備されているが、登頂は決して楽ではない。登山前日、私たちはふもとの町コタキナバル散策を楽しんでいた。緑色を帯びた海が潮風をどこからともなく送ってくれる。この潮風と白い陽の光だけでこの町に来た甲斐があったというものだ。ボルネオ島を縦横無尽に渡り歩いてきた私たちの疲れを癒してくれる最高の贈り物である。海辺で腰を降ろしながら、自然に心から感謝していた。この時点では、まだキナバル登山は考えていない。数時間後に、私たちは重い腰を上げ、町の中心部へと帰っていった。ここである。この時、私たちはキナバル山の情報を目にしてしまったのである。まるで友人へのみやげを買うかのように安易に「登ってみるか!」と思ってしまい、翌日、登山をすることになるのである。「なぜ山へ登るのか?」という質問に対して「そこに山があるから」と答える。山男というのは何てロマンチストなのだろうと長い間思っていたが、結構私たちのように、サラッと、色気もなにもなく決めてしまうものかも知れない。果たして私たちは4101 mの頂を目指して歩を進めたのである。

途中、ウツボカズラやラフレシアなどの珍植物を横目に楽しみ、3000 m付近で一泊する。ここまでは順調であった。しかし、頂上で朝日を拝みたいという欲にかられ、夜中2時に再び開始した登山は私たちの想像をはるかに上回るものだった。懐中電灯を片手に、ロープをたぐりながら急斜面の岩壁を登っていく。息も切れぎれ、意識ももうろう。「もうダメだ」と思ったその時、「あと10分で頂上に着く」との情報が耳に入る。人間というのは不思議なもので、ほんのちょっとでも希望を手にすると、地獄の淵からでも難なく脱出できるものなのである。とうとう午前4:45、相当な疲れはあるものの五体満足でLaw's Peak（山頂）に到着できた。あとは太陽が昇るのを待つだけである。ポケットに忍ばせていたエビアン（ミネラルウォーター）を飲みながら、中の上くらいのスナップ写真が撮ればこれ幸いと思っていた私は、1時間後に大ショックを受けることになるのである。全体の輪郭もつかめないような大きな大きな日の固まりが、上からではなく、下から昇ってきたのである。まるで頂上にいる私たちが、太陽の真ん中に吸い込まれていくかのように、圧倒的な迫力で太陽が眼前に現れたのである。「自然で奴あ…」思わず誰もが心の中でつぶやいたはずである。「自然の演出は決して裏切らない」、この実感だけを頼りに私たちは生きているのである。この感覚（feeling）だけが友達なのである。feeling、feeling、feeling…。（作増良介 4年）

1 今後の活動予定

- ・総会 7月2日（木） 7:00 P Mより
- ・9月に山行を計画中。
- ・山の会祭り、各種趣味の会、山岳映画の上映会、山小屋建設、東京でのたまり場設定等。

2 お願い：年会費3000円の納入宜しくお願い致します。

振込先 第一勧業銀行 沼袋支店 普通預金 1218236 稲門山の会 幹事 関根聰一郎

編集後記

山は逃げない。あした夕べの友は山。毎日毎日是不変なのですが、梅雨時の奥深い山に入り込んだ様な、ベトーとした変な時代です。成熟化社会のハードルは高いそうです。大先輩の号令の下、稲山会通信を引き受けました。故宮垣君の項は、奥様にご了解頂き紹介させて頂きました。迫田さん、作増君有難うございました。会員の皆様の近況は、役員で集まり、適宜抽出させて頂きました。ヘボな編集ですが労に免じて御容赦の程。サア山へ行こう。今年の夏の天気はどーかな。（新井、名達他）